様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０４２８４

研究課題名（和文）多文化状況の保育活動における幼児の数量発達と保育者の支援に関する研究

研究課題名（英文）Young children's mathematical development and teachers' support in multicultural childcare

研究代表者
榊原　知美（SAKAKIBARA, Tomomi）

東京学芸大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：２０４３５２７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，幼児や保育者が文化的文脈の相互調整を頻繁に行うことが予想される，多文化状況にある保育活動への参加を通した幼児の数量発達の過程とそれを支える保育者の支援の文化的特徴を解明することである。多文化保育を行っている保育所と外国人学校附属の幼稚部の5歳児クラスを対象に，保育活動の縦断的観察と保育者面接を行ったところ，保育活動に数量の要素は頻繁に埋め込まれていたが，数の操作などは殆ど観察されないことが確認された。一方，幼児や保育者によるコミュニケーションでは，多様な文脈間の調整がみられた。数量発達に関わる埋め込み型の支援については，多文化保育特有の実践上の工夫が必要となることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で得られた知見は，多文化状況の保育において知的発達の支援よりもむしろ文脈間の調整というコミュニケーション上の課題の解決が前面化することを示したものであり，このような状況における保育が直面する課題の基本的な構造を実証的に明らかにしたという点で学術的な価値を有するものである。本研究の成果を踏まえ，一般的な日本の園で行われており，幼児の数量発達に効果的であることが確認されている埋め込み型の支援をどのように多文化状況の保育において実施するか検討していくことによって，小学校での学習に困難を経験する傾向にある多文化の幼児への有効な支援の開発にも結び付くものと期待できる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to investigate young children’s mathematical development and the cultural characteristics of teachers’ support in multicultural childcare in which children and teachers’ frequent adjustment of the cultural context was expected. Longitudinal observations of the classrooms of five-year-olds and interviews conducted with teachers at a daycare center and kindergarten attached to a foreign school in Japan revealed that, similar to the previous findings in monocultural childcare, mathematics components were embedded frequently in multicultural childcare activities that did not focus on mathematics teaching. However, most of the observed mathematics was rather simple. In relation to children and teachers’ communication, various efforts to adjust contextual differences were observed. These findings suggest that practical modifications that embed mathematics appropriately in multicultural childcare activities are needed.

研究分野：発達心理学

キーワード：多文化　保育　幼児　数量発達　保育者

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

幼児の知的発達と文化的文脈に関する従来の研究では，例えば，Rogoff（2003）の「導かれた参加」の概念に代表されるように，既存の文化的文脈が幼児の知的発達を方向づける過程が主に検討されてきた。しかし，相互交渉の参加者が互いに文脈を調整して新たな文化的文脈を生成し，これまでとは異なる知的発達の経路がもたらされるという，文化的文脈と知的発達のダイナミックな関係については，十分には解明されてこなかった。本研究では，こうした研究開始当初の実証的・理論的研究の状況を踏まえ，多文化状況にある保育活動への参加を通した幼児の知的発達の過程とそれを支える保育者の支援の文化的特徴を解明することを通して，文化的文脈と幼児の知的発達の複雑で生成的な関係について，より精密な理解を得ることを目指した。

２．研究の目的

本研究の目的は，幼児や保育者が文化的文脈の相互調整を頻繁に行うことが予想される，多文化状況にある保育活動への参加を通した幼児の知的発達の過程とそれを支える保育者の支援の文化的特徴を解明することである。本研究では幼児の知的発達のなかでも，特に数量概念の発達に焦点をあてた。保育の多文化状況としては，保育者側が安定した文化的多数派とならないため文脈間の調整が生じやすい次の2 つの状況，文化的少数者の保育者が文化的多数者の幼児集団を保育する状況（状況1）と保育者集団内および幼児集団内に文化的多様性がある状況（状況2）を対象とした。

このような研究によって，文脈間の調整と知的発達の関係のみならず，保育者側の文化的視点の制約にしばられない新しい多文化保育のあり方を検討していくための基礎的なデータも得ることが期待できると考えた。近年，外国人の定住化にともない，日本においても多文化保育のニーズが高まっている。保育者が文化的多数派とならない多文化状況における保育者の実践知の機能とその変化を明らかにすることで，文化的同質性を暗黙の前提としない保育実践のあり方を検討し，日本における体系的な多文化保育プログラムの開発にも寄与することが可能になる。また，日本の保育実践では，保育者が日常の保育活動の様々な場面に非意図的に数量の要素を埋め込み，それが幼児の数量理解を効果的に促進していることが知られている（榊原，2006, 2014）。こうした保育者の支援のスタイルが多文化状況の保育活動においても有効に機能するか否かという点についても本研究を通して検討が可能であると考えた。

３．研究の方法

状況1と状況2の園における幼児の数量発達の過程と保育者の支援の特徴について検討するため，保育活動の縦断的観察と保育者への面接を実施した。加えて，日本人の幼児が多数通う台湾の幼稚園における保育者面接のすでに収集ずみのデータの再分析を行った。

（1）状況1の園における調査

① 保育活動の縦断的観察： 幼児の多くが文化的多数者集団を構成し，保育者がそれとは異なる文化に属している保育実践の現場を対象とした。具体的には，中華系保育所の5歳児1クラス（在籍児23名，うち中国・台湾につながる幼児14名，中国語モノリンガル児2名）を対象に，2015年4月～11月にかけて月1～2回程度（計8回），午前中の保育活動の自然観察を行った。担任は日本人保育者1名で，日本語による保育が行われていた。記録には，2台のビデオカメラを使用し，固定および移動撮影した。

② 保育者への面接： 観察対象となった保育所の保育者5名（3, 4, 5歳児担任1名ずつ，補助の保

育者，園長）および課外活動の指導者1名を対象に面接調査を実施した。対象者には，面接に先立って事前アンケートを配布し，対象者の文化的背景，保育にかかわる教育と保育経験などについて質問した。面接は1人30分程度個別に実施し，子ども観・保育観，幼児の数量発達に対する保育者の役割と信念，多文化保育特有の保育ストラテジーなどに関わる7～11項目について聞き取りを行った。回答はICレコーダを用いて記録した。

（2）状況2の園における調査

① 保育活動の縦断的観察： 保育者集団内に文化的多様性があり，幼児集団内にも文化的多様性がある状況で保育実践が行われている現場を対象とした。具体的には，中華系外国人学校附属の幼稚部の5歳児1クラス（在籍児34名，うち両親ともに中華系9名，国際結婚7名）を対象に，2015年10月～2016年2月に計7回（約42時間）の保育活動の自然観察を行った。担任は台湾人と日本人保育者2名で，主に中国語による保育が行われていたが，補助的に日本語も用いられていた。ビデオカメラによる動画の撮影が許可されなかったため，記録には主にフィールドノーツとICレコーダーを使用した。

② 保育者への面接： 状況2の園において，観察対象クラスの保育者2名に面接調査を実施した。面接は状況1の園における調査と同様，1人30分程度個別に実施し，子ども観・保育観，幼児の数量発達に対する保育者の役割と信念，多文化保育特有の保育ストラテジーなどついて聞き取りを行った。回答はICレコーダを用いて記録した。

（3）日本人の幼児が数多く通う台湾の幼稚園における保育者面接のすでに収集ずみのデータの再分析

台北で日本人の幼児が数多く通う（全園児の1/3-1/2）幼稚園3園において収集した保育者への面接と補助的な保育観察データの再分析を行った。保育者面接は，対象園の保育者5名を対象に2016年9月に行われた。質問項目は，幼児の文化的背景・言語，多言語・多文化保育，子ども観・保育者観に関わる計11項目で構成された。保育活動の補助的な観察も，対象園の年長クラスにおいて15分～1時間にわたり実施した。

４．研究成果

(1) 保育における数量活動と保育者の信念

数量活動の頻度と内容について，状況1の園の保育活動の観察データを分析した。その結果，数量の要素（数，算術，形，測定，パターン）は数量の教授を目的としない多様な保育活動に頻繁に埋め込まれており，観察された保育活動の35%でみられた。これは多文化保育を行っていない日本の園を対象とした先行研究で得られた知見と類似するものである。しかしながら，本研究で観察された数量活動の内容に目を向けてみると，活動に関連した数や形に保育者が言及するなど単純な形式のものが大半であり，数の操作を幼児に求めるといったより複雑な数活動は殆ど観察されなかった。保育者面接を通して明らかになった数量活動に対する保育者の信念については，一般的な日本の園と同様の傾向が確認された。このような保育者の信念にも関わらず数量活動が複雑化しない傾向は，多文化保育では数量活動などの知的発達に直結する活動に参与することよりも，多文化状況で生じるコミュニケーション上の課題への対処が保育者や幼児に多く求められることと関連している可能性が考えられる。このような課題への対処について，以下(2)～(4)で示す。

(2) 幼児間でのコミュニケーション構造

幼児の数量概念の発達の基盤となる多文化状況の特性を把握するために，状況1の園における幼児間でのコミュニケーション構造の分析をおこなった。具体的には，中国から来日直後の中国語モノリンガル児に焦点をあて，保育活動への参加プロセスにおける日本語モノリンガル児やバイリンガル児とのやりとりに焦点をあてて検討した。その結果，言葉が通じない場合でも，幼児は幼児なりに自発的にコミュニケーションを工夫して共生を志向した多様な試みを行っていることが明らかになった。例えば，ジェスチャーを用いて一緒に遊ぶ，バイリンガル児に通訳を頼んだり，バイリンガル児が自発的に通訳をする，保育者の指示が理解できないときに周囲の幼児の行動をさりげなく模倣する，などの幼児の行動が観察された。保育活動の観察と保育者への面接データから，このような幼児同士の自発的な共生行動は，保育者が「主体性」など自身の重視する中心的な価値は意識しつつも，中心的な価値と関係しない他の文化的側面については寛容性の高い態度で幼児と関わることで促されることが示唆された。

(3) 母語以外の言語を獲得していく過程における言語使用の実態

文化間移動をする幼児が母語以外の言語を獲得していく過程における言語使用の実態について，状況2の園における5歳児のコードスイッチングに着目して検討した。具体的には，1. 状況2の園における幼児間および幼児—保育者間のやりとりの特徴，2. 言語コードスイッチングが生じた場面，3. 言語コードスイッチングが生じた理由の3点について分析・考察を行った。その結果，文化間移動をする幼児が母語以外の言語を獲得していく過程において，消極的なコミュニケーションだけでなく，自ら積極的・能動的に相手に関わる積極的なコミュニケーションもしばしば生じることが明らかになった。さらに，幼児が相手の得意言語に対応した言語コードスイッチングを行っていることや，大人を対象とした先行研究と異なり，幼児の自然会話場面における言語コードスイッチングでは，文内コードスイッチングより文間コードスイッチングの方がより多く生じていることなども明らかになった。

(4) 台湾で日本人が数多く通う園との比較検討

数量概念の発達の基盤となる多文化状況の特徴を把握するための比較対象として，台湾で日本人の幼児が数多く通う幼稚園において収集した保育者への面接と補助的な保育観察データの再分析を行った。その結果，例えば，友達と遊ぶための玩具を家から持参できる日を設定するなど，台湾の園においても共通の言葉を持たない幼児たちが一緒に保育に参加していかれるような保育上の多様な工夫が報告された。また，言語発達についても，年少で入園した幼児が年中までにはある程度の日中バイリンガルになる傾向が報告された。その過程で，幼児同士の通訳の大切さも指摘された。これらの点は，日本の園における調査結果とも共通するものである。ただし，その背後にある保育に対する信念に関しては細かい違いがみられ，例えば，幼児が園で学ぶ最も大切なことについて，台湾の幼児園では「自分で考える」などの自立性が強調されたが，これは日本の園で重要視される「主体性」とはいくつかの点で異なる可能性がある。また，保育の観察では，例えば，保育者が幼児に指示したり注意したりするときに笑顔を見せるかどうかなど，一見，同じスタイルの自由保育を行っているようでも，保育者—幼児間のローカルな相互交渉がその国の文化を反映する形で異なることが示唆された。

以上のように，多文化状況の保育においては，数量の要素は保育活動に頻繁に埋め込まれているが，保育者が数や形に言及するなど単純な形式のものが大半であること，一方，幼児や保

育者によるコミュニケーションでは多様な文脈間の調整が行われていることが確認された。このことは，多文化状況の保育では，コミュニケーション上の課題の解決に重点が置かれ，それに関連した幼児の発達が促進されるものの，知的発達に関わる埋め込み型の支援をこのようなダイナミックなコミュニケーションの文脈の中で行うことは簡単ではなく，一般の保育園とは異なる実践上の工夫が求められることを示唆するものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 渡辺 忠温・榊原 知美 (2019) 外国人児童生徒の指導者・支援者からみた子どもおよび保護者の抱える問題とその原因　国際教育評論, 15, 1-17　査読無

② 黄 琬茜・山名 裕子・榊原 知美・和田 美香 (2018) 多文化保育における幼児のことば：5 歳児のコードスイッチングに着目して，保育学研究，56(3), 174-185 査読有
DOI: 10.20617/reccej.56.3_174

③ 榊原 知美 (2018) 遊びを通して育まれる数量･図形の理解とその援助　幼児教育じほう, 46 (7), 12-18 査読無

④ 榊原 知美 (2018) 保育がはぐくむ幼児の数量知識—幼小での連続性ある援助を目指して　初等教育資料, 965, 72-75　査読無

〔学会発表〕（計 11 件）

① 黄 琬茜・榊原 知美・山名 裕子・和田 美香 (2016) 日中二言語で保育をしている幼稚園における子どもの言語使用－5 歳児の言語切替に関する観察事例　日本教育心理学会第 58 回総会

② Yamana, Y., Sakakibara, T., Wada, M, & Huang, W. (2016). The interactions among the children in the multicultural care and education. EECERA 26th Conference (European Early Childhood Education Research Association).

③ Wada, M., Yamana, Y, Sakakibara, T., & Huang, Wan-Chien (2016). Tolerance in Japanese nursery teachers in multicultural childcare settings when communicating with parents from different culture: Problems faced by nursery teachers. The 8th Asian Society of Child Care.

④ Pian, C., & Sakakibara, T. (2016). Dynamics of intercultural understanding: An analysis of dialogical classes between Chinese and Japanese university students. In S. Oh, T. Sakakibara & T. Watanabe (Organizers), How can we understand and study culture? New methodologies of dialogical research for mutual understanding. Symposium conducted at the 31st International Congress of Psychology.

⑤ Sakakibara, T., Wada, M., Yamana, Y., & Huang, W. (2016). Young children's spontaneous symbiotic strategies in a multi-cultural preschool. The 31st International Congress of Psychology.

⑥ 榊原 知美・和田 美香 (2016)　多文化保育における子どもの自発的な共生方略と保育者の援助　ラウンドテーブル「多文化保育から子どもの発達を考える」での話題提供 (企画者 榊原 知美)　日本発達心理学会第 27 回大会

⑦ 高木 光太郎・榊原 知美 (2016)　自伝的記憶の共同想起における自発的な聞き手行動の発達　日本発達心理学会第 27 回大会

⑧ 榊原 知美 (2016)　日中の大学生による対話的交流授業における異文化理解プロセス　シンポジウム「プロセスから考える異文化理解」での話題提供 (企画者　渡辺 忠温，榊原 知美)　日本発達心理学会第 27 回大会

⑨ 渡辺 忠温・榊原 知美・山本 登志哉・片 成男 (2015) 日中大学生の所有をめぐる関係調整過程　法と心理学会第 16 回大会

⑩ Sakakibara, T. (2015). The role of numerical classifiers in Japanese children's numerical development. In S. Takahira (Organizer), Development of numerical concept and language. Symposium conducted at the 17th European Conference on Developmental Psychology.

⑪ Takagi, K., & Sakakibara, T. (2015). Development of hearers behavior in young children's joint remembering of autobiographical memory. 17th European Conference on Developmental Psychology.

〔図書〕（計　3　件）

① 榊原 知美 (2019)　乳幼児期の学びの過程と特性１ 認知的学び　杉村伸一郎・山名裕子（編）保育の心理学 183 頁（pp. 145-156）中央法規

② 榊原 知美 (2019)　文化と発達　藤村 宜之 (編著)　発達心理学－周りの世界とかかわりながら人はいかに育つか（第 2 版） 274 頁（pp.214-233）ミネルヴァ書房

③ 榊原 知美 (2015)　子どもの遊びと学び　清水 益治・森 俊之・杉村 伸一郎(編)　保育の心理学II 200 頁 (pp.85-96)　中央法規

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(2)研究協力者
研究協力者氏名：山名 裕子
ローマ字氏名：YAMANA, Yuko

研究協力者氏名：和田 美香
ローマ字氏名：WADA, Mika

研究協力者氏名：黄 琬茜
ローマ字氏名：HUANG, Wan-Chien

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。